
金色のガッシュ!! 《蒼い本の魔物 ダスト》

鎧月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金色のガッシュ！！ 《蒼い本の魔物 ダスト》

【Nコード】

N5347K

【作者名】

鎧月

【あらすじ】

人間界で行われる100人の魔物による闘い。

最後まで勝ち残った者が、魔界の王として君臨することとなる。

勝利条件は魔物の力の鍵である、魔本を燃やすこと。

しかし魔物はパートナーの人間がいなければ術を使うことができない。

この物語はそんな100人のなかの一人、

蒼い本を持つ魔物、ダストとパートナーの少女の物語

注意 この小説は作者に取ってサブ執筆としています。

メインの根詰まり時や、ネタが浮かんだ時に進めることとなります。
(つまり更新が遅いです)

人気が出ればメインとサブが同等になります。

LEVEL 1

『異世界』

その言葉を知らない者はいないだろう。

異なる世界、歩いてはいけない場所。

それは古今東西どんなところでも語られ、そして考えられてきた。

その考えは知らないことへの探求心からか？

それとも謎に対する冒険心からだろうか？

考え出したら止まることを知らない

だからこそ、人々は考える。

神話、宗教、思想、哲学、小説、漫画、映画などその種類はジャンルは様々だ。

異世界はどのようなところか。

もしかしたらサルではなく、別の生物が進化した世界かもしれない。

もしかしたらそれは死後のたどり着く世界なのかも知れない。

もしかしたらその世界の人間には羽が生えているかもしれない。

このように様々な可能性に満ちているのだ。

さて先程のジャンルの中に漫画や小説、映画などがあつたが、これらの共通点は分かるだろうか、それは一から造り出すと言うことと、それを見る、または読む人がいる事だ。

だからこそ感情移入がしやすいように、主人公が異世界に飛ばされることが多い。

だがこの物語りの主人公は少し違う。

この物語の主人公たちは自ら別の世界に行くのだ。
それも異世界からこの世界に、

太陽が昇り異世界の大都市を照らす。

この世界でも太陽が一番の光源であることには変わりはない。

大都市といっても、構想ビルが立ち並ぶような大都市ではない、むしろ鉄のみで造られた建物などこの都市には無い可能性のほうが高い。

殆どの建物が、鉄筋コンクリートのようなもので造られている様だ。

建物の共通点に多いのは、三角錐の屋根に円柱の壁というドーム状の部屋が家の何処かには在るものが多い。

近世のヨーロッパ風の城のイメージ高いようだ。

異世界といえど建物にそう違いは起きない。

もちろん明らかに建築技術的にありえないものは存在するのだが、そこは割合する。

しかしここは異世界だ建物程度に気を取られてはいけない。

地面が空に浮いているのだ、浮遊島という表現が一番近いだろう。もちろん大きさはバラバラで島と言う表現ができるのはごく僅かしかない。

この物語の主の一人はそんな浮遊地の上にある一つの住宅に存在していた。

浮遊地の上に立てられた一つの住宅。

太陽の光りが都市を照らしてそれなりの時間が経ちすでに大勢のこの世界の住人達が眼を覚まし、活動している。

しかしこの住宅の主はまだ深い眠りについていた。

掛け布団を深く被っているため、その顔は見るできない。

ベットと掛け布団の間からは何か、黒い三角形の石のような硬質感のあるものが数珠状に連なっている物がはみ出していた。
それは長く床に着いてしまっているほどだ。

「グウ……ガアア……グウウツ……」

いびきが一定のリズムを刻んでいるが、全く起きる気配はない。

しかし起きないわけにはいかない、部屋の壁際にある高級感がある机の上には何冊かの本と鞆、羊用紙、万年筆などが置かれていた。

本に使われている文字は異世界の文字で書かれている。
本は積まれて上から

『初級呪文集・攻撃術編』

『人間界について、ゼウス・ベル署』

『肉体強化の魔力消費率について、一括と持続』

『中級呪文入門』

などの本が置かれていた。

どの本も栞や線引きがされており、本のくたびれ具合から見ても熱心に読まれていることが分かる。

どれも術の関係したものが多く、タイトルから持ち主の社会的立場が分かる。

そう学生なのだこの部屋の主は
そしてお解りだろうか、すでに日は昇りこのまま寝ていてはこの部屋の主かどうなるかも、

学生の付属品である遅刻である。

「グウーガアアア……………」

「……………パパルモーン—————!!」

「……………グッ……………?…んっんんんっ」

しかし、一体の鳴き声によって主は眼を覚ました。
被るようにしていた布団を退かし上半身を起き上がらせる。

そして今まで隠れていた主の素顔があらわになった。

頭脳的というより活発な、またはワイルドとあらわされる容姿だ。

通常の間人ではありえない純白の皮膚。

鋼と言うよりは銀色に近い肩まで届くほどの、ボリウムがある髪。
三日月ではなく、先端に尖りを見せる耳

そして水色をした透明感がある枝状に分かれた二本の角。

どれも人間ではありえない特徴ばかりだ、唯一ありえるのは瞳の碧
眼だろう。

しかしそれはあたり前のことだこの部屋の主
『ダスト・ルナモンド』が人では無いからだ。

そもそもこの世界に人間など居ない。

ここは魔界、魔物が住み魔物が国を作っている世界である。

「ハアー—んんっ—」

ダストはベットから降り、背伸びをする。

降りたことにより先程布団からはみ出していた物体が全貌を現した。

尻尾だ

硬質な物体はダストの腰の骨盤あたりに空けられた穴から出てきていている。

いや色は黒だが、尻尾のような物は水色をした角と同じ要に結晶のような輝きを持っていた。

尻尾と表すより尾角おすのと表した方が良さだろう。

鉱石的な尻角だが彼の体の一部には違いなく、背伸びと連動して真っ直ぐに上に伸びる。

その長さは天井にも着きそうなほど長い

「パルパル!!」

「この声………カルディオか………」

ダストは自分の目を覚ましてくれた友の鳴き声にようやく気がつい

た。

「ふぁぁ～んん～………眠っ……」

まだ完全に目を覚ましたわけではないのか、ふらつきながら窓に近づいた。

手を使うのも面倒臭いとしても言うように長い尾角を器用に使い、紺のカーテンを開けた。

光りが目に浸みるのを我慢しながら、出窓から身を乗り出した。

「パルパルウ！」

「あぁ～おはようさん、カルディオ」

ダストはこの鳴き声の主である友人であるカルディオに挨拶をした。カルディオもようやく起きたダストに急かすようにさらに鳴く。

「パルモン！！」

「ああ、今から行くから持ってきてくれ」

もちろん、このカルディオも人間ではない。

この世界の言い方で言えば、動物系馬族と言っべきだろうか

見かけは犬ほどに小さな黒い毛並みの子馬であり、耳の後ろ当たりから突き出した角が特徴的だ。
背中にはカバンが固定されている。

ちなみにダストの場合、人系有角族となる。
しかし魔界には様々な姿の魔物たちが居るので完全にその種族を分けることは不可能に近い。

人系、動物系、植物系、機械系と分けることが精一杯である。

「パルルウ！」
「分かった、分かった……二度寝しねえし、朝飯は途中で買っよ」
「パル」

鳴き声と言葉であるのに会話が見事に成立している。
これは別にダストが馬語（鳴き声は馬からかけ離れてはいるが）を習得している訳ではない

ただそれなりに長い付き合いであるから理解できるだけなのだ。

「あーあ、今日も時間道理には起きれなかったか………」

ベットからかなり離れた位置に目覚まし時計
円形のアナログタイプの物である。

タイマーは30分前にセットされているが、この時計は主を起
すという役目を全うできずに破壊されていた。

歯車などの機構が貫かれたことにより、内部から飛び出している。

「はあ……………」

ダストはクローゼットから服を取り出しながら、深いため息をつい
た。

もう何台目だろうこの時計は？ と……………

LEVEL 1（後書き）

感想は作者の心の力です。

LEVEL 2

学校へ向かう最短の道、

商店街のメインストリートをダストとカルディオは爆走していた。

石畳の道路が彼らが走った後はまるで、裸の地面を走ったような砂埃を上げる。

それどころか地響きすら感じさせる勢いだ。

「おお、ダス坊！ リンゴ持って行きなあ！」

「サンキュー、おっさん！ 朝飯食ってないんだよ」

「コラ！ ダスト！ カルディオ！ 商品に砂が入っちゃまうだろ！」

「嘘つくんじゃないっ！ しつかりと風石で防御してんだろ！」
「パルウ！」

「こんな日まで遅刻か？ お前らに投票した意味無くすなよ」

「まだ遅刻じゃないっつの！」
「パルルルウ！！」

爆走という速度を出していながら、しつかりと商店街の住人たちと

会話をしていく二体の魔物。

人間ならばキャッチすることも無理な速度で投げられたリンゴを掴みダストは走りながら起用に噛付く、

よく喉に詰まらないものだ。

もちろんこの商店街の住人も人間ではなく、魔物である。

顔が羊の者や、下半身が蛇のもの別々の動物のパーツを組み合わせた者など、ある意味人間以上に個性が力あるのだ。

ちなみにリンゴを渡したおっさんは熊顔の魔物だ。

まだ朝と言えど、ストリートはまったく無人という訳ではなく、人が遅い朝食の材料を買い求めに来ている。

ダストとカルディオはそのような人たちを轢いてしまわないように注意しながら走り続けた。

カルディオが骨格を無視し、二本足で走っているのは幻覚と思っていた。

「パルパルパルウ！」

「あ？…無理だ、無理、今のお前の大きさじゃ、俺を乗せらんねえよ」

「パル……」

カルディオは残念そうに俯いた、それでも地を翔る足はすでに残像しか見えず、その本体を確認できないほどに速度が上がっている。

しかし走る者たちの表情は普段のものより少し力を入れているだけなのだから、それはシユールでもなくただ変としか言えないのだ。

言うておくが目が飛び出すほど力を入れていない。

そうしている間にもダストたちは学校の入口に近づいた。

この町には四つのメインストリートがある。

町の中心にあるものに向かって、東西南北にそれぞれ向かって伸びているものだ。

ちなみにこのメインストリートのおかげで、町の地理は覚えやすいのだ。

そのおかげでこの町では迷子がほとんどいない。

町の中心にあるもの、それは今ダストたちが向かっている学校の入口がある。

入口である巨大な穴が

大地に空いた巨大な穴、それはこの町の魔物たちには様々な呼ばれ方をしている。

『学校への縦穴』

『大地のヘソ』

『元、自殺の名所』

『現、不法投棄場』

などがあるが、最後の二つをしようものなら、すぐさま安全設置術が発動し結構重い罰が課せられることとなる。

大地に空いた穴はその呼び名を表すように深く、底は暗闇に覆われて見ることができない。

そんな穴にダストとカルディオは減速することなく近づき

「ダァァーイブツ!!」
「パル―モンツ!!」

躊躇いもなく飛び込んだ。

「バツカモ―ンっ!!」

そんな怒声と共に繰り出されてた鋭い一閃

スパパァ―ンツッ!

「へブツ!!」
「パルっ!!」

爽快な音を発ててハリセンはダストとカルディオの頭に直撃した。
正座した状態では商店街を爆走できる二人も避けることはできない。

「まったく! お前らは何度、遅刻すれば気が済むんだ! これ
通算何回目だ!」

「いいじゃないすか、センル先生 今日ぐらい...」
「パパルモ―ン...」

「今日だからいけないんだろうが!!」

カッキイーンン!!

「ホームウラーン!？」

「パパールウ!？」

「うわ……先生木製バットだよ……」

「ダストくん、痛そう……」

「でも……しっかりと角で着け止めてるわね」

「その分の衝撃が頭に伝わって……」

「つーかあの角に刺さってるバット見ると反省の色ないんだろうな」

「じゃなきゃ、毎回遅刻セーフのために飛び降りないでしょ……」

「なんで彼らには安全術、発動しないのかしら？」

「なんだかんだあの二体が優秀じゃなきゃ、死んでるわよ」

ほかの生徒たちの話声も聞こえるが、教師は気にすることなく説教を続ける。

しかも校門前で二体を正座させてまで。

縦穴の中、底にはまさしく別の世界が広がっていた。

底にある学園は地上には見られなかった、鉄の鉱石でできた校舎が存在していた。

それだけではない、この学園はあの大地のヘソの穴に続く巨大洞窟内部にあるのだが、地下にも関わらず月光のような優しい光が降り注いでいた。

また校舎のさらに奥に続く洞窟から風に乗って雪が降り注いでいた。

そんな美しい景色の中でダストとカルディオは何10mもある大地のヘソに単身飛び込んで、来たことについて大目玉を喰らっていた。

「全くっ！ お前らは今日がどれだけ重要な日か、理解してない訳じゃないんだろっな！！」

「はい、先生！ エリートになれるか、なれないかの瀬戸際です！」

「言い方が生々しい！！」

バアアアアンツーーーー！！

「タンバリンっう！？」

「パルウウ……………」

タンバリンを耳元で鳴らされたからか、器官が揺らされカルディオが正座しながら横に倒れた。

「パ…パ…ルウ…」

「カルディオ！？ このぐらいで気絶するなあー！！！」

その様子に教師とけん引車、そこに居た魔物の生徒たちは一斉に溜息をついた。

「さて先生、そろそろ出したいんだがいいかね」

「すません……………おい！ おまえら今度こそ一人残らず乗り込めえ

！！」

「はい！」

生徒たちは返事をし、けん引車に繋がれた大型車に乗り込んでいく、その時に先生と話していたけん引車に挨拶も忘れない。

そうこのけん引車も魔物である。
人形のような姿の多い、機械系の魔物の中でも珍しく乗り物の姿に
変身する術を覚えられる種族だ。

彼らのような魔物は、普通に別の魔物が操縦するよりも精密な動き
ができ仕事が多いらしい。

「少し急ぐよ。息子が選ばれているかも知れないからねえ」

「コーラルPさんの息子さんも最終選考に？」

「ああ、いよいよだね」

「そうですね……………おい！　いつまで俯いてんだあ！　二体とも、
とつとと乗り込めえ！！」

教師は今だ正座しているダストたちに指示をする
ちなみにこの教師、自分が言う前に少しでも動く生徒にさえ術を
放つ、理不尽な教師である。

「パ、パルウ！」

「無駄だカルディオ……………アッシュ先生は数少ない俺らが逆らえない
奴だ……………ハアア……………」

「パルウ……………パアア……………」

二体の溜息は雪風に解けて流れていった。
冷たい地面で足が痺れ、よろめきながらも立ち上がる二体に地上ま

で届きそうな大声で言った。

「いいかお前らぁ！！ 今日人間界で魔物100人バトル！！
『魔界の王様決定戦』の合格者発表日だぁぁぁ！！」

LEVEL 3 (前書き)

この小説には、独自設定が含まれています

LEVEL 3

漆黒の空間

濃厚な闇の中に月や星のような淡い光は一つもない。

地面すらなく、そこはむしろ恒星がまったくない宇宙空間と表現したほうがいいのかもわからない。

「……………」

そんな空間に一体の魔物が居た。

男性人型の高齢な魔物で、揃えられた顎髭は着ている服装の高貴さもあり、かなりの威厳を持っている。

意識があるのか定かではないが、瞳を閉じて空間に身を任せていた。

「うむう……………」

目を開けても光がなく何も捉えられない空間において、男の臉を越えて目に強い光が差し込んできた。

光源は一冊の本であった。

ハードカバーの紅い本

文庫本、三冊ほどの厚みがあり、
表紙には五つの円と頂点を向かい合うように配置された、二つの二
等辺三角形によって作られたマークが特徴的だ。

しかし本が現れたことによって、あることがわかった。

男の大きさ - 体型である。

男の前に現れた本、それは対比で切手程度の大きさしかなかったの
だ。

つまりこの老いた男はかなり巨大なのだ。

本でその程度なのだから、彼にとっては普通サイズの人間など指先
で摘み上げられるだろう。

「これは懐かしい……………千年の時が経とうとも、お前の姿は昨日
のように覚えているぞ……………紅き本よ……………」

男は静かに呟く。

その言葉に含まれた心はとても重く、千年という時の重みまで含まれているようだ。

本は男の言葉に答えるように眼前でページをめくった。

『お久しぶりです、ゼウス・ベル。』

私も貴方が最後の勝利を勝ち取った瞬間をよく覚えていますよ』

本の開かれたページの文章に、

男――ゼウスはおもしろそうに笑みを浮かべた。

「ほう……以前のように複数の意味に取れる言葉ではなく、しっかりと会話で返すのだな……」

『そうですね、』

王としての最後の仕事を伝えるのですから、これぐらいは『

「最後か……」

魔界の王、ゼウスはこれまでの千年を振り返る。

王としての始まり、自分の原点とも言える人間界での戦いを――

非情でありながら、この千年の糧となったあの戦い

百人の子供たちの生き残りを掛けた闘い

そして、これから自分に関係する者たちが関わるであろう闘い

闘いであり、戦いでもある

「では発表して貰おう、紅き本よ。

我が後継者候補、百人の子らの名をな――」

ガタガタガタッ

魔界の整備されていない、凸凹の道をコーラルPは時速50kmで走っていた。

タイヤの接地面から出る騒音と土埃はかなりの物だが、彼はこの道

50年のベテラン
けん引車といえど、車内に居る生徒達に振動を全く伝えることなく、快適な環境を整えていた

「なあゝアツシユ先生ゝそろそろ教えてくれよゝ」

「何がだ？ それとそのバカみたいな体勢をやめろ」

ダストは、前のシートから後ろの席のアツシユに向かい背をそらし、顔を上下逆にしながら話している

人間換算なら中学生程のダストだが、その姿はとても上の者への礼儀が伴っていない。

「そう言う先生だって、生徒のいる車内でタバコ吸っていいのかよ？
生徒の体に悪いだろうが」

「ニコチン程度に魔物の肺が、浸食される訳ねえんだよ」

「いや…空箱の山、横において言うと言説力ないぞ…」
「パルパル」

ダストの横に空箱は、席の一つを占領し座席の灰皿は4つ程埋まっ
ていている

確かに説得力はない、ミジンコほどにもない

しかも二本を一回で吸うというのは異常だ。

「うるせい！ カミさんに葉巻、止めさせられてんだよー!!」

「うわ、ダセえー 尻に敷かれてやんのww」

「パルパルパルww」

「やかましいわああああー!!」

ズババアアアアアッ!!

「竹刀イイイイイ!!??」

「バアアアアル!!??」

「で、何だっけか？」

「この野郎…！ さらに会話に戻りやがって」
「パルパルウ……」

ハア…とダストは一度溜息をついてから
質問をしておした。

「だからよ、王様決定戦の審査基準って何なんだよ
もうこれから発表を聞きに行くんだし、一応学校でそれっぽいデス
トもしたしよ
教えてくれてもいいんじゃないね」

「なんで、俺がそんなこと知ってると思うんだ」

「なんでって、そりゃあ――」

ゾクッ！

「パルツ！？」

突如、ガルディオの全身の体毛が逆立つ
その原因はとなり座っている、ダストにあった。

「――アツシュ先生が”普通”の教師とは思えねえからじゃね
？」

ダストの目には、先ほどまでの軽い雰囲気はなく、
瞳孔は縦に鋭くなっている

スパンッ

軽い音を発てアツシュは、ハリセンでダストの頭を叩いた。

「あ？」

「んなデケエ闘気、出してんじゃねえよ

そんなもんは、これからの戦いに取っつけ、それと俺は普通の教師
に過ぎん」

「はっ」

（何が普通の教師だよ……… 壮大なネタばれを隠す気ゼロで言いやが

って)

満足とか行かないが、自分の結果を知ったダストは大人しく席に座り直した。

だが、はみ出した尻尾が揺れてるのを見ると嬉しいのだろう。

(まあいいさ、先生が何者かは俺が王になって部下にしてから聞いてやるぜ)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5347k/>

金色のガッシュ!! 《蒼い本の魔物 ダスト》

2010年10月9日01時04分発行